

第四話 渡し場

テレビや映画の時代劇をみてみると、時たま渡し場の光景に出くわす。川岸に小屋掛けの茶店があり、旅人が船出を待っている。そのうち船頭が「船が出るぞ……」と大声でさけぶ。何やらのどかな光景である。

こうした渡しは、今日ではよほど田舎にでも行かなければ目にすることはできないが、昔はあちこちにみられた。とりわけ、江戸時代には幕府の軍事戦略上の理由、あるいは土木技術の未発達、経済上の理由から、主要渡河地点のほとんどに橋がかけられていなかった。あっても粗末な木橋や土橋で、多くは船渡しであった。だから、ひとたび長雨が続き、増水すればもう渡れない。のどかな光景どころではなかった。「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」という名文句があるように、旅人にとって渡し場はもつとも厄介な場所であった。

ところで、その昔、市域にもこのような渡し場が三ヶ所もあった。無論、多摩川の渡しであるが、西から拝島の渡し、平たいらの渡し、築地ついでじの渡しである。今回はこれらの渡しについて紹介しよう。



築地の渡し場（川島新作氏画）

築地の渡し

築地の渡しは現在の多摩大橋付近にあった。明治以降は福島村地先にあったため「福島の渡し」とも呼ばれた。この道筋は村山方面と八王子・大山（神奈川県）を結ぶ「おおやまみち大山道」と呼ばれる古道で、この渡しも宝永年間（一七〇四—一）にはすでに機能していたことが玉川町の並木安子家文書によって知られる。以来、拜島の渡しと同様、舟渡しを原則とし、湯水期には簡単な木橋をかけ、旅人の便に供していた。

この渡しの管理は、築地・福島・郷地・中神・宮沢、および粟ノ須・石川（八王子市）、中藤（武蔵村山市）、砂川（立川市）の九ヶ村で組織された組合によってなされ、実際の運行は築地村民によって行なわれていた（中野和夫家文書）。一方、船は一艘さふねであったが、万延二年（一八六一）の記録には「長さ四丈五尺、横七尺五寸」とあり、馬渡用のかなり大きな船も使われていたことがわかる。



大正初期の運賃額表

なお、江戸時代の運賃は不明であるが、福島町広福寺に所蔵されている大正初期の「運賃額表」（写真参照）には、「独歩一人二銭、自転車一輛人共三銭」などと詳しく記されている。これは当時、渡し場に掲示されていたものである。一見に値しよう。

ところで、幕末もおしつまった慶応二年（一八六六）六月、この渡し場で血なまぐさい事件がおこった。その十三日、名栗（埼玉県）で発生した農民一揆の一隊は諸所を打ちこわしながら市域に乱入、その人数は三千人にもほった。

同十六日、中神・宮沢両村で二軒の豪農宅を打ちこわしたあと、一揆勢はこの渡し場へ集結、八王子方面へ渡りはじめた。ところが、対岸に待ち構えていた日野の農兵隊は、鉄砲五十挺を一勢に発砲、鳶口や木刀、掛矢ぐらいしか持たない一揆勢はひとたまりもなく、くもの子を散らすように敗走したのであった。いわゆる武州一揆であるが、この築地の渡しは、武州一揆敗走の地なので

ある。この戦場で一揆側は二十一名の死者と四十一名の逮捕者を出している。渡し場が幕府・支配者側にとって軍事戦略上、重要な拠点であったことを物語るとともに、市域でおこったもつとも血なまぐさい出来事であったといえよう。

この渡しも他の渡しと同様、昭和初期には衰退した。そして、この地に昭和四十一年、待望の多摩大橋がかけられ、今日に至っている。

このように市域にはその昔、三つの渡し場があった。それぞれに興味深い歴史をもち、多くの人々に利用されてきたのである。しかし、冒頭でも述べたように、ひとたび洪水ともなれば、川留めが何日も続き、人々は足留めを余儀なくされたことは言うまでもない。

中神村の豪商中野久次郎の日記、文政十一年（一八二八）の『諸用日記控』に次のような記述がある。十月十三日から三日間は八王子大善寺の「お十夜」という恒例の縁日であった。例年ならば参詣に行く女・子供でにぎわう築地の渡しは、この年、洪水で船留めとなり、閑散としている、というのである。おそらく、この年のお十夜には、多摩川の北側からはだれも行くことができなかつたのであろう。まさに「越すに越されぬ多摩川」であったのである。

（昭和五十五年八月一日号・九月一日号掲載）